

# 祐天寺表惣門の由来

伊藤 丈

祐天上人の百回忌にあたる文化十四年（一八一七）、表惣門が建て替えられた。これより先の寛政七年（一七九五）、御蔵前から寄進があり、やはり建て替えがあったが、このたびの修復は、ことに上人の一百年御忌ということで、九世祐東の力の入れようは並ではない。

文化十三年十二月、祐東は御蔵前の旗本などの世話人衆へおもむき、このたびの修復につき内談に及ぶと、委細は寺社奉行に申し上ぐべしとの意見の一致をみ、祐東はただちにこの事を、寺社司御月番松平和泉守へ、二月十五日、願書にして提出したのである。

同二月十七日、和泉守から役僧一人を遣わせとの呼状に、欽然を参上させると、応対の役人川住市右衛門は、「先年、表惣門建て替え修復の節は、奉行所より見分まいられ候や否や」と、欽然に尋ねた。

「前に、建て替えあい願ひ候節は、ご見分なくしてご許可これあり」  
欽然が答えると、追って沙汰を待つよう指示を受け、欽然は祐天寺に帰った。

二十三日、再び呼状がきた。明二十四日四時、当方へ役僧一人を差し向けられるよう、和泉守から伝言であった。

二十四日、欽然がまかり出ると、川住市右衛門は、

「惣門修復の儀、願書のとおり差し許さる」

こう欽然に申し伝えた。

この吉報を受けた祐東は、すぐさま芝増上寺の役所に届け、二十五日には、使僧をもって御鳥見衆へ届け出た。

現在の表惣門は、この文化十四年に、上人の百回御忌の節目として建てられたものである。爾来、二百年の星霜を経て、今なお厳然とその姿をとどめている。

表惣門が初めて設けられたのは、享保二十年（一七三五）四月中旬、上人が入寂されて十七年後のことである。